

代表作 13 時代小説

日本文藝家協会編



日本文藝家協会編

代表作時代小説

第十三卷

編纂委員

武蔵野次郎

尾崎秀樹

村上元三

富田常雄

山岡莊八

東京文藝社

代表作時代小説 普及版 一〇〇円
第十三卷

昭和五十五年七月三十日発行

編纂者 日本文藝家協会

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区大久保二六三

出張所 東京都新宿区払方町一番地

振替・東京一六二一七五七

電話・(三六)二五五〇

0093-809813-5170

無検印承認

まえがき

時代小説の不振がいわれる。しかしそれは近視眼的な見方であって、かならずしもそうとはかりは云えない。

たしかに毎月の中間雑誌の目次づらだけ見ると、時代ものが少い感じはする。ヘハイ・ミスの孤独と情欲とかヘセックスがえがく若ものの断面といった調子のもものが、ハンランする状況では、時代ものの介入する余地はない。しかしその反面、チャンバラ活劇ふうな娯楽ものとはちがう充実した作品が、大衆から求められているのも事実なのだ。

時代小説は風俗小説以上に、創作上の約束ごとが多い。時代考証のむずかしさなどもその一例だ。だが時代考証はあくまで創造の一過程であって、すべてではない。そのことをはきちがえると、まるで時代考証だけを後生大事に抱えこんだような堅い作品ができる。時代考証のむずかしさは、どれだけ調べたかではなくて、調べたものをどれだけ捨てたかにあるといわれるのは、そのことを指すのであろう。

そのために新人が容易には、出にくいという事情もある。だがそのことはけつしてマイナスではなく、むしろ時代小説の更新に大きくプラスに働いている。

吉川英治は、二十数年まえに「私はなぜ時代小説を書くか」という文章を発表し、そのなかで「時代小説というものが、今日の現代的な進歩的な中に、一つの重要な役目をもっているということ」にふれて書いたことがあった。

歴史がただ史実の羅列・過去の記録だけにとどまるものであるなら、その価値は半減する。問題はそれがどのような形で今日に生き、明日に働きかけるかを、それぞれの立場から歴史へ問いかけることにかかっている。作家は自由な立場に立って、史実に抱泥せず、また動かされず、自分はこう考えるということを作品をもって示すべきであり、その点に時代小説の魅力も生れるのだ。その意味から云えば、過去を書いている時代小説も、実は現代小説であり、また文学的・民族的遺産にもとづく反省の文学ともなり得る。

以上が「なぜ時代小説を書くか」と題した設問への、吉川英治の答えなのであるが、この文章のなかには学ぶべき多くの問題がふくまれている。

時代小説は、単に過去の事象に取材しただけの大衆小説ではない。むしろ日本の民族的な遺産をふまえた大衆のロマンである点に、大きくかわる文学なのだ。過去をふりむくのではなく、現代から未来へ向う意識を内包しなくてはならないといわれるのも、その

意味からだろう。

「代表作時代小説」は、そのような視野に立って現代の文壇地図を鳥瞰できる唯一の手引書でもある。大家から新人にいたる作品の諸相は、時代小説の今日的な表情を物語る。私たちはそこから時代小説の将来のあり方を学ぶべきであろう。

尾崎 秀樹

目次

喪	嘘	霧	わ	美	刺	二	汐	す	寝	平	御	首	竹	同
		の	び	濃		本		こ	取		用			門
服		底	す	浪		の	の	たん	られ	将	控			の
		か	け	人	客	指	涙	猪	武	門	帳		光	宴
記		ら					衛	兵	士					
田	武	滝	杉	司	柴	佐	五	神	加	海	井	井	伊	池
辺	田	口	本	馬	田	賀	味	坂	賀	音	伏	上	藤	波
聖	八	康	苑	遼	鍊	潜	康	次	淳	寺	鱒	友	桂	正
子	洲	彦	子	郎	三		祐	郎	子	潮	二	一郎	一	太
	満				郎					五				郎
二	三	二	一	一	一	二	二	一	七	七	三	四	三	九
六	五	一	七	七	三	五	三	九	七	七	三	四	三	九
七	五	一	七	七	三	五	三	九	七	七	三	四	三	九

甘	露	の	門	童門冬二	三六
江	戸	前	にて	富田常雄	三七
あ	た	し	と	永井路子	三三
衆	道	伝	来記	南條範夫	三三
赤	毛	の	司天台	新田次郎	三五
夜	の		桜	平岩弓枝	三七
お	は	ぐ	ろどぶ	穂積 驚	三五
肥	っ	た	鼠	村上元三	四〇
お	ば	け	きゅうたろう伝	八切止夫	四三
銀	杏	屋	敷	柳田知怒夫	四四
一	つ	目	達磨	山岡 莊八	四六
繁	蔵	御	用	山口 瞳	四九

まえがき 尾崎 秀樹
 あとがき 武蔵野次郎

同^{どう}

門^{もん}

の

宴^{えん}

池

波

正

太

郎

作者のことは

池波正太郎

「同門の宴」は、自分が五十歳をこえてから（それまで生きていられたら……）書きたいとおもっている素材の中の一つでした。

ですが、去年……。

身辺にある事態がおこり、どうしても書きたくなり、ついに筆をとってしまいました。ある事態が爽快なものであったように、この小説を書くとき、ついつい気分が爽快に走りかかるのを懸命に引きしめ引きしめ書いたことがおもい出されます。こういう素材を書くことは、なかなか、私の年齢ではむずかしく書き終って首をかしげていましたが、発表されると、諸方から意外の好評をいただき、或る意味から、ほんとに安心したものでした。

著者略歴

大正十二年一月二十五日 東京都生

東京都品川区荏原二ノ二三四

日本文芸家協会々員

主著（小説）真田騒動（恩田木工）、眼、応仁の乱、人斬り半次郎、幕末新選組、錯乱（三十五年上半年期直木賞受賞）

（上演戯曲）檻の中、渡辺嶺山、名寄岩、黒雲峠、牧野富太郎、賊将等

（現住所）〒142 品川区荏原二ノ二三四

一

あかつきの
別れがなくば生半なまなかに
悔む心の出やせまい
明の鳥の……。

魚を焼くけむりが生ぐさく立ちこめている台所の隅に立ち、堀平右衛門直元は胸の中で萩江ぶしの〔八重垣〕を唄っていた。これは彼が知っている只一つの唄であつた。

すぐ目の前で、実母のおすずが鰯の干物を焼いてくれている。

この干物、俗にいう〔くさや〕というやつで、これを伊豆諸島の名物として江戸人が好むようになってから年久しい。

室鰯の内臓や汚物を洗い去り、使い古した塩水につけこんだものを日に干し、干してはつけこんで鼈甲色にあげた干物であるから、火にかけると一種独特の臭気を放つ。

この強烈な臭いを好むものはたまらなく好み、嫌悪するものは鬱鬱してきらいぬく。

どちらにしても、上流階級が好む食物ではないのだ。

おすずの傍で下女のおしんが浅蜷の汁をこしらえていた。

いま、この堀家にいるものは、台所の三人のほか、若党の和泉清八と中間の権次郎だけである。

あるじの堀平右衛門は五十歳になり、殿さま土岐守正次の用人兼小姓頭をつとめ、藩中でも老巧、謹直をもつて鳴る、先ず重臣のひとりといつてもよろしかろう。

その平右衛門が、妻子が外出中の御長屋の台所で、下等な魚の干物の焼きあがるのをたのしみつつ、ついに、「明けのからすの、声ぞ気の毒……」

声に出して唄いはじめてしまった。

おすずが、ふり向き、笑いながらもくびを振つて見せる。

（いまのお前さまの身分には、ふさわしくない唄ですよ）

と、実母は眼でいつてるようだ。

平右衛門は、うなずき、「よい臭いだ。久しく、この臭いを嗅がなんだ……」

つぶやいてから、居間へ戻つた。

平右衛門の長屋は〔六間仕切〕とよばれるもので、この江戸藩邸内にある家臣の長屋の中でも大きいほうであつた。

今日は当直にあたるのだが、鼯くねもちの殿さまは越後の国もとへ帰つており、参観で江戸へやつて来るのは来

年の六月であるから、藩邸内ものんびりしている。

だから、堀平右衛門は当直の日でも、昼飯を自分の長屋で摂ることにしていた。

今日も御殿から長屋へ戻つて来ると、浅草に住む実母のすが、あの臭い、平右衛門の好物を持つて台所からおずおずとあらわれ、

「そつと、かくれておあがり」

「これは何より。ちようどよい。女房むすめどもは、寺まいりで留守じや」

「それは、よかつた」

というわけで、いつもは表座敷へも通されぬ六十七歳のおすが、いそいそと、むかしの我子の昼飯をととのえはじめたのである。

(もし、このようなところを見たら、女房どのめ、どのような面をすることか……)

居間の縁側につけ、ここにまで濃厚にただよつてくる臭気を久しぶりに吸いこみながら、平右衛門は苦笑をうかべた。

先日までの残暑が、まるで夢のように思われるほど、今日の微風は冷んやりとしている。

堀の向うの御殿の大屋根も、初秋のふかい空の色の中に生き生きと呼吸をしているように見えた。

でつぷりと肥えた体軀を羽織・袴に包み、端然と縁に

かけている堀平右衛門は、禄高三百五十石、定府(代々江戸藩邸につとめること)側用人の貫禄じゆうぶんといったところだが……。

「ひとつ流れの……」

好物への期待につばをためながらの上機嫌に浮かれ、思わずまた唄い出したとき、

「お帰りでござります」

庭の木戸が開いて、中間の権次郎があわただしく告げた。

「何……」

もう貫禄も何もあつたものではなく、堀平右衛門があわてふためいて台所へ走つたときは、もう遅かつた。

入口土間(玄関)と台所は、ほとんど隣り合つているものだから、外から家の中へ歩み入つた平右衛門の妻・常の細く尖つた鼻は、たちまちに干物の臭気を嗅ぎつけたいまい、

「おのれ、またこのようなふるまいを……」

常の怒声が、びしびしと飛んだ。若党も中間も下女も、それからおすずも、みな平伏して、あるじよりも数倍おそろしい、この家つきの「奥さま」のお叱りをうけている。

寺まいりの途中、常は持病の貧血をおこし、別の若党と召使いにつきそわれ、藩邸へ引返して来たのだ。

寺まじりのほうは娘夫婦が行つたらしい。

「このように汚らわしい食物は土中へ埋めよ。名も知れぬ女は去れ」

常の声は、すさまじいものであつた。

名も知れぬ女といつたのは、夫・平右衛門を生んだおすずを指したのである。

平右衛門は悄然と、しかもすばやく身をひるがえし、居間の大小をとつて庭へ下り、心得顔の権次郎が開けて待つていてくれた木戸口から外へすべり出た。

宏大な藩邸内の両側にならぶ家臣長屋の裏側は石畳の通路で、片側は六尺の土堀、その向うは馬場になつてゐる。

通路をぬけ、作業奉行詰所の裏手へ出たとき、権次郎がおすずをみちびいて追いついて来た。この渡り中間は、あぶら切つた中年男で一癖も二癖もあるやつだけに、こういうときには何かと便利であつた。

「すまなんだな、母者」

平右衛門がいうと、おすずは例のごとく平気な笑顔を見せ、

「お前さまも大変なことで……」

「権次郎。母者を勝手門から……よいな」

「心得ておりまする」

藩士二名が通りかかり、礼をした。

とたんに平右衛門は胸をそらし、鷹揚にうなずいてみせる。

この町家の隠居らしい老婆と「御用人さま」の關係を知る藩士はいない筈であつた。

行きかけたおすずが、ふと駆け戻つて来、

「あとで、ゆるりと話すつもりでいましたが、こんなことになつて……」

耳に口をよせ、何かささやくと、堀平右衛門の顔色が、さつと變つた。

「では、待つていますよ」

権次郎のうしろにつき、勝手門へ去る実母の後姿を見送りながら、平右衛門が茫然と、しかも感動をこめてつぶやいた。

「そりや、まことのことか……」

二

堀平右衛門は、同じ藩中で江戸家老をつとめていた安達隼人正の妾腹に生まれた。

隼人正が、召使いのおすずに手をつけたのである。おすずは浅草・阿部川町の菓子舗で加奈屋新兵衛の次女に生まれ、加奈屋が藩邸出入りのものであるところから、安達家の召使いになつたのであつた。

平右衛門を身ごもつたおすずは、ただちに実家へ引き

わたされた。

安達家には、すでに二人の男子がいたし、

「行末のめんどろは、じゆうぶんに見てつかわすから……」

というので、母子ともに安達家への出入りを禁止されたのである。

封建の時代には、どこにでもよくあつたことだし、事実、安達家からの仕送りはおらず母子の暮しをまかなうに不足はなかつた。

ところが……。

平右衛門七歳のとき、安達家の長男・主馬が二十歳で急死をしてしまった。彼が木刀を削つているときに少し手を傷け、その傷口が破傷風の原因となり、健康な主馬が呆気なく世を去つてしまうと、

(これは……)

と、安達隼人正も考えざるを得ない。

次男の源二郎は生まれつきの病弱で、医師の言葉によれば、「三十まで保てばよいとお考えなさるべきで……」だそうな。

これで、平右衛門の存在が再認識されることになった。

おすずも、当時、小三郎と名づけられていた我子を手放すのをいやがつたが、

「源二郎様の御寿命は見きわめがついているようなものだ。ゆえに、小三郎どののは行末、一国の家老職につくことになるのじや。ここをよく考えて見なされ」
安達家の使者に立つた藩士・大沢甚六郎から、ついに説きふせられてしまったのである。

かくて平右衛門は、強引に生母の手からもぎとられ、安達家の子息として、武家の教育をうけることになった。ところが、である。

数年たつと、どういふかげんか、次男の源二郎の健康がめきめきとよくなつてきた。

この源二郎が、いまは安達家の当主となつて国もとへ転じ、家老職をつとめているわけなのだが……。

だからつまり、平右衛門は、安達家にとつて、また邪魔者に戻つたわけであつた。

二十五歳で、平右衛門が側用人の堀家へ養子に迎えられるまでの約十年間、厄介者あつかいの白い眼で見られつつ、彼も相当に荒れたものだ。

おもしろくないことがあれば、町住いの実母のもとへ行き、半年も帰らなかつたこともある。

大形にいえば、放蕩無頼の十年であつた。

安達家の納戸から刀剣や骨董品を持ち出して売りはらい、酒と女に注ぎこむことなどもあつて、一時は安達家の親族会議で、